



Title	後期近代英語の従属節における接続詞 that の有無について
Author(s)	大津, 智彦
Citation	大阪外国語大学英米研究. 2006, 30, p. 37-52
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99301
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

後期近代英語の 従属節における接続詞 *that* の有無について

大津智彦

1 導入

Otsu (1999) に述べているように、筆者は、現代英語において、(i) 動詞が導く従属節、(ii) 形容詞が導く従属節、(iii) 名詞句の同格となる従属節、における接続詞 *that* の有無に関して研究を進める中で、この現象を歴史的に扱う研究が非常に少ないことに気付き、古英語から現代英語に至るまでの変遷を探ることを課題としてきた。1400年前後については Warner (1982)、初期近代英語期については Rissanen (1991) があることから、これまでのところ先行研究の空白部分となる古英語 (Otsu (2002a))、初期中英語 (Otsu (2004))、後期中英語 (Otsu (1999)、Otsu (2002b)) について上の (i) に関する調査を行ったが、今回はそれらの研究を踏まえたうえでの後期近代英語を対象とした調査である。

上記4つの研究 (Otsu (1999, 2002a, b, 2004)) で明らかになったポイントは次の3点である。

- ・ 従来信じられていたように *that* を伴わない従属節 (ゼロ形) は時代を経るにしたがって広まったものではなく、後期中英語においてはもちろんのこと、古英語においてもしばしば観察できる形式である。
- ・ ただし、ゼロ形が認められるのは、おもに主節の動詞とそれが導く従属節の間に副詞類が来る場合である。

- ・これは古い英語において間接話法が未発達であったため、直接話法で行うように接続詞 *that* なしで従属節を繋いだためであると考えられる。¹

さて、今回は後期近代英語が対象となるが、以下の点に焦点を置いて調査を行った。

- ・18世紀以降の規範文法の流行に象徴されることばの秩序化が進むなかで、間接話法も後期近代英語ではひとつの範疇として確立したものであるが、上に言及した副詞類を主節の動詞と従属節の間に持つゼロ形の消長は如何になったか。
- ・もし、後期近代英語においてもそのようなゼロ形が現れているとすればそれはどのような条件下においてか。*that* を伴う場合とどのように異なるのか。
- ・今回の研究により、断続する部分があるものの古英語から現代英語にまでわたり接続詞 *that* の有無を歴史的に調査したことになるが、その変遷の中で注目に値する点は何か。

2 調査方法

この調査に当たっては、Appendix に挙げた後期近代英語の文学作品30点(18世紀15点10.3メガバイト、19世紀15点13.2メガバイト)の電子ファイルをProject Gutenberg (<http://www.promo.net/pg/>) から取り寄せ、検索ソフトによって用例を抽出した。コーパスとして文学作品を選んだのは引用符で囲まれた会話の部分を話し言葉と見做せば、書き言葉、話し言葉の両方を同時に調査できる利点があるためである。² 今回対象となった構文は次の(1)のように *say* を主節の動詞とし、それが導く従属節に *if* 節もしくは *when* 節を含むものである。検索は動詞 *say* とその屈折形全てをキーワードとしたが、特に *say* を選んだのは、ひとつには直接話法、間接話法両方に用いられる動詞であること、ふたつ目には他の動詞と比較して多くの用例の収集を期待できること、三つ目にはこれまで筆者が行った調査から、*that* の有無の比率は動

詞毎に異なるものの、どの動詞においても影響を与える要因に対して同じ振る舞いをみせる、などの判断によるものである。

- (1) a. I said, that if it was not troublesome and presuming too much, I would request him to tell me all the little circumstances of his life. (joth)
- b. He said if Brooke wanted a pelting, he could get it cheaper by gong to the hustings. (mdmar)
- c. He said that my face appeared much fairer and smoother when he looked on me from the ground. (paml)
- d. Mr d'Urberville says you must be a good girl if you are at all as you appear. (tess)

(1a)、(1b) は副詞節が従属節内部で前方に来る場合、(1c)、(1d) は後方に来る場合を表している。以下それぞれタイプ a、b、c、d と呼ぶことにする。

3 調査結果

3.1 全体的傾向

まず表1に全体的な傾向を世紀別に示した。

表1 各タイプの時代別頻度

	18世紀	19世紀	合計
タイプ a	19	12	31
タイプ b	17	8	25
タイプ c	7	8	15
タイプ d	19	21	40
合計	62	49	111

タイプ a, b : $\chi^2=0.271369$; $P=0.602415$

タイプ c, d : $\chi^2=0.00303935$; $P=0.956035$

タイプ a とタイプ b、タイプ c とタイプ d がそれぞれ *that* 形、ゼロ形の対立のペアをなすので、タイプ a、b のペアとタイプ c、d のペアで別々に独立性の検定を行ったところ、両ペアともに列方向の因子と行方向の因子は独立している（無関係である）という結果が出た。仔細な要因を考慮に入れず、全体的傾向として見たときには時代間の変化は認められないことになる。この表に関して注目したいのは、ゼロ形であるタイプ b とタイプ d が18世紀と19世紀を合計してそれぞれ25例と40例で、対応する *that* 形であるタイプ a 及びタイプ c の31例と15例にほぼ並ぶかもしくは大きく上回っていることである。

タイプ b に関しては、副詞節が主節動詞と従属節の間に来る場合にはゼロ形をとるという古英語以来の傾向が、18世紀においてもなお持続していることがわかる。これは上で述べたとおり、間接話法が十分に発達していない初期の英語では、*if* 節などが主節動詞と従属節の間に来る場合、その複雑さのため接続詞 *that* が *if* 節、帰結節の順に両節を導くことができず、まるで直接話法のように接続詞 *that* なしで従属節をつなげたからであると考えたが、この時代においても間接話法の未発達を理由とすることができるのだろうか。この点に関しては3.2で書き言葉、話し言葉による違いを扱う際に検討する。

他方、副詞節が文尾に来る場合、古英語、初期中英語を対象にした調査ではタイプ d のようなゼロ形は頻度が非常に低く、むしろ *that* を伴うタイプ c の形式をとる場合が圧倒的に多かった。これは、文尾に *if* 節などが来る場合は主節動詞と従属節の境界が複雑化することがなく、接続詞 *that* が帰結節、*if* 節の両方を導くことができるためだと考えた (Otsu (2002 a, b))。³ ではなぜ、後期近代英語においてはゼロ形であるタイプ d の頻度がこれほど高いのであろうか。実は、古英語、初期中英語では従属節が副詞節を含まない単文である場合も *that* を伴う例のほうが多い。それがいつの時代からか、現代英語におけるように *say* などのような基本的な動詞では従属節が単文でもゼロ形の頻度が高くなる。後期近代英語においてタイプ d の頻度が高い問題は、両者とも主節動詞と従属節との間に副詞類などの挿入がない点において共通

することから、従属節が単文であるゼロ形の伸長と深く関わっていると考えられる。しかし、この点については未調査であるので、現在のところは課題として残しておきたい。

3.2 引用符の有無による違い

抽出された用例が引用符で囲まれているか否かで区別した結果が表2である。表1で時代間の差がないということであったので、とりあえずは時代の区分は考慮せず集計してみた。

表2 引用符の有無による違い

	引用符なし	引用符あり	合計
a	20	11	31
b	16	9	25
c	13	2	15
d	21	19	40
合計	70	41	111

タイプ a, b : $\chi^2 = 0.001606$; $P = 0.9680$

タイプ c, d : $P = 0.0287691$ (Fisher's exact test)

引用符の有無（つまり話し言葉か書き言葉か）が与える影響に関しタイプ a、b とタイプ c、d のペアごとに統計処理を行った。その結果、タイプ a、b については独立性の検定で引用符の有無と *that* の有無は独立しており（無関係であり）、タイプ c、d についてはフィッシャーの直接確率計算法（両側確率）で5%の有意水準において関係があるとの結果が出た。⁴ この結果は何を意味するのであろうか。

まず、タイプ a、b のペアについて考える。筆者のこれまでの調査において、歴史的に見てタイプ b のようなゼロ形は直接話法を起源とし、口語的な

特徴を留めた構文であると分析した。それを反映して、ヘルシンキコーパスを使った後期中英語、初期近代英語を対象とした調査では (Otsu 2002b, Rissanen (1991)), 口語に近いテキストタイプ (romances, mystery plays, trial records, sermons, fiction, comedies) でゼロ形 (副詞類の挿入有無に関わらず) の頻度が高くなることが指摘されている。表2だけを見れば話し言葉にゼロ形が多いという予測が外れることになる。

そこで、引用符がないにもかかわらずゼロ形を取っている例を調べてみると、18世紀を中心に次のような用例が見つかるのである。

- (2) I said, if Harvey would write him a letter, and enclose a fifty pound note,
I should take care to deliver it. (joth)
- (3) But yet, I said, if she forbore her screaming, I would do her no harm.
(paml)
- (4) He said, “if we were governed by our own consent, in the persons of our
representatives, he could not imagine of whom we were afraid, or against
whom we were to fight.” (totb)

いずれの例も時制の一致と人称の変化から間接話法であるといえるが、*said* のあとにコンマが置かれ直接話法を思わせる形になっている。⁵ 事実、(4) では従属節の部分が引用符で囲まれ、直接話法との混乱を起こしているのである。そこで、時代の違いが要因となっている可能性を探るため、タイプ b だけをとりあげ、時代別に集計してみると表3の結果となった。

表3 タイプbの時代別変化

	引用符なし	引用符あり	合計
18世紀	14	3	17
19世紀	2	6	8
	16	9	25

P=0.00986062 (Fisher's exact test)

後期近代英語の従属節における接続詞 *that* の有無について

表の列方向の因子と行方向の因子の独立性を統計上の検定にかけたところ、1%有意水準で時代の経過と引用符の有無がタイプ b をとる比率に相互関係があるという結果である。⁶ 表3に即して言うと、18世紀では引用符がなくてもゼロ形が選ばれる頻度が高いのに対し、19世紀では引用符がある場合の方がゼロ形が選ばれる頻度が大幅に高いということになる。これは18世紀までの文章には書き言葉でもそのスタイルによっては口語的な特徴を持ったタイプ b のような構文が用いられることが可能であったのに対し、19世紀前後を境にそのような可能性が縮小したことを示唆している。

次に、タイプ b に対応するタイプ a についても同じように表にまとめ (表4)、独立性の検定を行ったところ、時代の経過と引用符の有無に相互関係はないとの結果が出た。つまり、表4からわかるように、タイプ a のように *that* を伴う構文は、時代の経過に関わりなく、引用符なし、つまり書き言葉に現れる特徴があるということである。⁷

表4 タイプ a の時代別変化

	引用符なし	引用符あり	合計
18世紀	12	7	19
19世紀	8	4	12
	20	11	31

P=1.0000 (Fisher's exact test)

タイプ c, d に関しても時代別に引用符の有無が与える影響を見てみる。表5はタイプ c について集計したものだが、検定を行ったところ統計的な有意性はない。時代の変化と引用符の有無に関連性はなく、*that* を含むタイプ c はタイプ a と同じように時代を通して書き言葉において好んで使われてきたことが窺える。

表5 タイプcの時代別変化

	引用符なし	引用符あり	合計
18世紀	7	0	7
19世紀	6	2	8
	13	2	15

P=0.466667 (Fisher's exact test)

他方、タイプ d について見てみると (表6)、時代の変化と引用符の有無は統計的に1%の有意水準を示しており、18世紀から19世紀にかけて引用符の有無 (話し言葉か書き言葉か) がタイプ d の出現に影響を及ぼすようになったことがわかる。つまり、タイプ b と同じように、18世紀には引用符なしで圧倒的に多く現れていたものが、19世紀になると逆に引用符ありの条件で現れる頻度の方が断然高くなっているのである。

表6 タイプdの時代別変化

	引用符なし	引用符あり	合計
18世紀	15	4	19
19世紀	6	15	21
	21	19	40

P=0.00194708 (Fisher's exact test)

ちなみに、引用符なしで現れたタイプ d の例を18世紀と19世紀からそれぞれ2つずつ挙げる。

- (5) Simpson said, he would willingly go for Col, if young Col or his servant would undertake to pilot us to a harbour. (joth)
- (6) He says, "'tis time enough for him to mind him, when he can return his

- notice, and be grateful!" (pam1)
- (7) To facilitate matters I said I would gladly remain behind, if they pleased.
(cprfd)
- (8) Mrs. Fairfax said she should not be surprised if he were to go straight
from the Leas to London. (janey)

18世紀の例 ((5), (6)) では *said* のあとにコンマが入っている点に注目されたい。また、(6) では人称の変化から間接話法であると解釈できるが従属節が引用符で囲まれ、この構文の起源が直接話法にあることを示唆している。それに対して19世紀の例 ((7), (8)) では *said* のあとにコンマが置かれることはなく、* ゼロ形とはいえ、主節・従属節の緊密性を示し間接話法としての完成度の高さを窺わせる点も注目しておきたい。

以上をまとめると、*that* を伴うタイプ a, c は時代の変化に関わらず、書き言葉を中心に出現していたのに対し、ゼロ形となるタイプ b, d では19世紀においてその出現が引用符内、つまり話し言葉を中心とするようになったということである。タイプ a, b とタイプ c, d のペアにおいて、どちらかが増えればどちらかが減るといような競合関係にあるのではなく、19世紀以降、タイプによって現れる媒体に違いが生じ出したことが明らかになった。よって、セクション3.1で残しておいた問題、つまり、18, 19世紀においてもなお、ゼロ形の出現を間接話法の未発達に帰することができるかという点については、そういった口語的特徴を残す構文は話し言葉において引き継がれていくことになったと言えよう。

3.3 動詞句の複雑さ

ここでは *say* を含む動詞句が (9), (11) のように *say* のみでなるか、(10), (12) のように助動詞などとともに複合形をなすが与える影響について考察する。⁹

- (9) “He could only say that if I waited I should hear by post.” (advsh)
(10) “Read says if I have any, they must be a beggarly set.” (janey)
(11) He said that my face appeared much fairer and smoother when he looked on me from the ground, than it did upon a nearer view. (gulv)
(12) I happened to say it would be terrible if he should not find a speedy opportunity of returning to London. (joth)

表7に動詞句が単純か複合かでタイプ別に集計した結果を示した。ここでもタイプ a、b とタイプ c、d のペアに分けて分析する。表7の数値にペア別にフィッシャーの直接確率計算法を適用すると、タイプ a、b のペアでは5%レベルで統計学的に有意であるのに対して、タイプ c、d のペアでは統計学的な有意差はない。つまり、タイプ a、b のペアに関しては、表7から言えるのは、動詞句が複合形をなす場合、有意にタイプ b をとる頻度が低くなるのである。これはどうしてだろうか。まず、動詞句が複合形をなすタイプ a の用例をいくつか (9) 以外にも挙げてみる。

- (13) I have heard an officer say, that if women could be made to stand, they would do as well as men in a mere interchange of bullets from a distance. (joth)
(14) I will venture to say, that if you compare him with Vertot, in the same places of the Roman History, you will find that he excels Vertot. (joth)
(15) “One would almost say that, if there were a ghost at Thornfield Hall, this would be its haunt.” (janey)
(16) “I only called to say that if there was anything we could do, in present circumstances, mother or self, or Wickfield and Heep, -we should be really glad.” (cprfd)

これらの例において *that* を伴うのは、*say* に助動詞などが前置きのようにつけ加されることによって、視点が *say* という行為よりも *say* に伴う付加的な情報の部分に移り、*say* という行為のダイレクト感が希薄になることが原因として考えられる。対照的に (10) のように動詞句が単純な場合には *say* という行為にダイレクト感があり、ゼロ形と共にになると話者 (*say* の主語) の言葉をそのまま伝える響きがある。

次にタイプ b から4例 (全例) を挙げる。

- (17) “I must say, if it had not been for Ludovico, I should have died outright.”
(moud)
- (18) I should say, when no other passion could surmount my love, I returned
to visit her. (amel)
- (19) “I should rather say, if he has shown any painful feelings towards you,
you must consider how sensitive he has become from the wearing effect
of study.” (mdmar)
- (20) “I meant to say, if you have no compassion for his mother ; or if his faults
- you have been bitter on them.” (cprfd)

これらの例は助動詞などの付加がありながらゼロ形を取ったものだが頻度は圧倒的に低い。4例中3例までが引用符に囲まれた話し言葉である点に注目したい。動詞句が複合であってもゼロ形を取ることにより話しことばとしてのダイレクト感が伝わってくる。これは動詞句が *say* のみからなる単純なものであっても *that* 形を取ることによって形式ばった響きになることと表裏の関係にあると言える。

なお、タイプ c、d については助動詞などの付加による統計上の有意差は確認できなかった。ただ、統計的な正確さはないが、表7からタイプ c (*that* 形) の方がタイプ d (ゼロ形) よりも動詞句が複合である比率が高いことが窺える。いずれにしても、この問題は副詞類を伴う構文に限ったものではないの

で、従属節が単文の構文も含めてさらに大きな現代英語のコーパスを利用して再度検証する必要がある。

表7 *say* を含む動詞句の構成

	単純	複合	合計
a	18	13	31
b	21	4	25
c	11	4	15
d	36	4	40
合計	86	25	111

タイプ a, b : $P=0.0447542$ (Fisher's exact test)

タイプ c, c : $P=0.19341$ (Fisher's exact test)

3.4 その他の要因

以上で検討した要因（時代、引用符の有無、*say* への付加）の他にも、主節主語と従属節主語が同一指示であるか否か、従属節主語が名詞か代名詞か、のようにこれまで主に現代英語の研究で *that* 形、ゼロ形の選択に影響を与えることが確認されている要因や、*say* の時制も要因として分類・集計したがいずれも統計的な有意性がないという結果であった。これらは従属節が単文の場合その有意性が認められた要因であり、タイプ a, b のように副詞類の挿入がある場合にはそれにより無効に帰されることが理由として考えられる。タイプ c, d のように副詞類が文尾に来る場合は、従属節の主語の種類（名詞か代名詞か）が影響を及ぼす可能性があるはずだが、どういうわけか今回抽出された用例では従属節の主語のほとんどが代名詞であり（111例中98例）、その影響を観察することができなかった。

4 まとめ

セクション1の導入で挙げた今回の研究の焦点に沿って調査結果をまとめていく。1点目の副詞節を主節の動詞との間に持つゼロ形の消長および2点目の

存続したゼロ形の生起環境に関する主な発見は次のとおりである。ゼロ形であるタイプ b、タイプ d とともに18世紀から19世紀にかけて時代による違いを見せる。つまり、18世紀においては引用符なしの部分、言い換えると書き言葉においてゼロ形が用いられる頻度が高いのに対し、19世紀では逆に引用符がある部分、言い換えると話し言葉においてゼロ形が用いられる頻度が高くなる。これは英語の文体の発達に関わることで、セクション3.2でコンマの位置に関して述べたように、18世紀までは文学作品などでは書き言葉、話し言葉の区別が未整備であったため書き言葉においてもゼロ形が生じえたが、¹⁰19世紀になると文学作品の書き言葉においてはゼロ形は避けられる傾向となり、話し言葉において生き延びたものと思われる。なお、これには18世紀後半から始まる言葉の規範化への動きが関連していると考えられる。他方、*that* を伴うタイプ a、タイプ c は時代の経過に関わらず書き言葉を中心に出現する。

3番目の焦点、つまり古英語から現代英語にまでわたる接続詞 *that* の有無の変遷において注目すべき点は、話し言葉を起源とすると考えられるゼロ形が *that* 形とともに18世紀になるまで書き言葉において用いられ続けたが、19世紀を分岐点としてゼロ形は話し言葉、*that* 形は書き言葉と使い分けられるようになったことが明らかにされたことである。副詞類が主節の動詞と従属節の間に来る場合、書き言葉では *that* 形が好まれるという先入観があるが、これは19世紀以降の英語の知識だけに基づいたものである。¹¹

注

- 1 これは古英語において書き言葉が未発達であり、従位構造 (subordination) を苦手とし、等位構造 (coordination) や並立 (parataxis) に偏っていたことが起源であると見られる。中英語においては確かに従位構造が発達しているが、話法に関しては、明らかに直接話法であるのに *that* を伴うケースなどもよく見られ、直接・間接の区別がまだあいまいであったと言える。
- 2 小説などにおいて引用符で囲まれた会話の部分はもちろん厳密には話し言葉を反映しているとは言えない。しかし、音声資料やそれを転記した資料がない歴史的研究

- において引用符で囲まれた文は話し言葉を再現しようとしたものとして貴重と言える。同じ手法は Krug (2000) でも採られている。
- 3 主節動詞が単文の従属節を導く場合も *that* 形をとることが多い。
 - 4 フィッシャーの直接確立計算法を用いたのは表内に2を含むセルがあるからである。
 - 5 現代英語ではこのような場合、コンマがないことが多い。
 - 6 フィッシャーの直接確率計算法 (両側確率)。以下、表4から表7においてもこの検定法を用いた。
 - 7 筆者が行った調査ではタイプ a は古英語から確認されるが、本格的に現れだすのは初期英語からである。そして、初期英語において既にタイプ b よりも頻度が高い。
 - 8 一部の例外を除いて、ここに挙げた例以外でも今回抽出された19世紀のタイプ d の用例は引用符の有無を問わず、*said* のあとにコンマを持たない。
 - 9 *I say* (「あのね」の意)、*I dare say* は *that* を伴わない成句と考え対象からは外している。
 - 10 ここでいう書き言葉とは文学作品の語りの部分のことで、18世紀における書き言葉の文体差については別途調査を必要とする。
 - 11 18世紀までの書き言葉の文体が未整備で口語的要素を残す構文の出現を許していた点については文体の歴史として別途扱う必要がある。

参考文献

- Finegan, E. & D. Biber (1995) "That and Zero Complementisers in Late Modern English : exploring ARCHER from 1650 - 1990." In B. Aarts & C. Meyer eds., *The Verb in Contemporary English*. Cambridge : Cambridge University Press. 241-57.
- Jespersen, O. (1949) *A Modern English grammar On historical principles*. Part III. London : George Allen & Unwin Ltd.
- Krug, M. G. (2000) *Emerging English Modals*. Berlin : Mouton de Gruyter.
- Otsu, N. (1993) "On the Variation between *That* and Zero Connective as Object Clause Links in Modern British English." *Ronshu* 9 (Osaka University of Foreign Studies) : 41-50.
- Otsu, N. (1994) "On the Omission of the Conjunctive *That*, with Special Reference to Verbs Which Are Usually Considered to Require Its Presence." *Eibeikenkyu* 19 (Osaka University of Foreign Studies) : 247-60.
- Otsu, N. (1995) "On the Omission of the Conjunction *That* in Clauses Introduced by Adjectives." *English Corpus Studies* 2 : 27-43.
- Otsu, N. (1996) "On the Omission of the Conjunctive *That* in Clauses in Apposition to Nouns - Searching the Bank of English on the Internet CobuildDirect." *Eibeikenkyu* 21

(Osaka University of Foreign Studies) : 71-85.

- Otsu, N. (1999) "On the Absence of the Conjunction *That* in Late Middle English." *JELS* 16. *Papers from the Sixteenth National Conference of The Linguistic Society of Japan* : 191-200.
- Otsu, N. (2002a) "On the Absence of the Conjunction *that* in Late Middle English." In T.Saito, J. Nakamura & S. Yamazaki eds., *English Corpus Linguistics in Japan*. Amsterdam: Rodopi. 225-34.
- Otsu, N. (2002b) "On the Presence or Absence of the Conjunction *Pæt* in Old English, with Special Reference to Dependent Sentences Containing a *Gif*-clause." *English Language and Linguistics* 6.2 : 225-38.
- Rissanen, M. (1991) "On the History of *That/Zero* as Object Clause links in English." In Aijimer, K. & B. Altenberg eds., *English Corpus Linguistics*. London : Longman. 272-89.
- Thompson, Sandra A. & Anthony Mulac (1991b) "The Discourse Conditions for the Use of the Complementizer *That* in Conversational English." *Journal of Pragmatics* 15 : 237-51.
- Visser, F. Th. (1966) *An Historical Syntax of the English Language*, Vol. II. Leiden : E.J.Brill.
- Warner, A. (1982) *Complementation in Middle English and the Methodology of Historical Syntax*. London : Croom Helm.

Appendix : 使用したコーパス

出版年	著者	作品名	略式名
1704	Jonathan Swift	<i>A Tale of a Tub</i>	totb
1712	John Arbuthnot	<i>The History of John Bull</i>	bull
1726	Jonathan Swift	<i>Gulliver's Travels</i>	gulv
1740-42	Samuel Richardson	<i>Pamela (Vol. II.)</i>	paml
1743	Henry Fielding	<i>Amelia</i>	amel
1759	Samuel Johnson	<i>Rasselas, Prince of Abyssinia</i>	rasl
1760-67	Laurence Sterne	<i>Tristram Shandy</i>	tris
1764	Horace Walpole	<i>The Castle of Otranto</i>	cotr
1766	Tobias Smollett	<i>Travels Through France And Italy</i>	tfai
1770	Edmund Burke	<i>Thoughts on the Present Discontents, and Speeches</i>	tpds

大津智彦

1775	Samuel Johnson	<i>A Journey to the Western Isles of Scotland</i>	jwis
1785	James Boswell	<i>The Journal of a Tour to the Hebrides with Samuel Johnson, LL.D.</i>	joth
1789	Gilbert White	<i>The Natural History of Selborne</i>	nhs1
1791	James Boswell	<i>Life of Johnson</i>	life
1794	Ann Radcliffe	<i>The Mysteries of Udolpho</i>	moud
1813	Jane Austen	<i>Pride and Prejudice</i>	pandp
1847	Charlotte Bronte	<i>Jane Eyre</i>	janey
1847	Emily Bronte	<i>Wuthering Heights</i>	wuthr
1848	Elizabeth Gaskell	<i>Mary Barton</i>	mbrtn
1848	William Thackerary	<i>Vanity Fair</i>	vfair
1849-50	Charles Dickens	<i>David Copperfield</i>	cprfd
1860	Wilkie Collins	<i>The Woman in White</i>	wwhit
1871-72	George Eliot	<i>Middlemarch</i>	mdmar
1872	Samuel Butler	<i>Erewhon</i>	erwhn
1874	Thomas Hardy	<i>Far From The Madding Crowd</i>	crowd
1883	Arthur Conan Doyle	<i>A Study In Scarlet</i>	study
1883	Robert Louis Stevenson	<i>Treasure Island</i>	treas
1886	Robert Louis Stevenson	<i>The Strange Case of Dr. Jekyll and Mr. Hyde</i>	hyde
1891	Thomas Hardy	<i>Tess of the d'Urbervilles, A Pure Woman</i>	tess
1892	Arthur Conan Doyle	<i>The Adventures of Sherlock Holmes</i>	advsh